

2026 年 10 月 19 日

【XCR スプリントカップシリーズ 第7戦レポート / 北海道陸別町】

**一年の戦いを締めくくる最終戦は、GEOLANDAR 勢がワン・ツー・フィニッシュ!!
年間シリーズでは 5 クラス中 4 クラスで GEOLANDAR 装着車がチャンピオン獲得**



クロスカントリーと SUV 車両によって競われる「XCR スプリントカップシリーズ」は、発足から 5 年目のシーズンを締めくくる最終戦を 10 月 10 日(土)・11 日(日)に開催。第 6 戦「RALLY HOKKAIDO」の舞台にもなった北海道陸別町で行われた地区戦併催の「ラリーとかち 2026」は、“とかち晴れ”と称される爽やかな秋晴れに恵まれ、朝晩こそ冷え込んだものの日中は半袖でも過ごせる暖かさとなった。

競技は土曜日にコースの下見を行うレッキを行い、日曜日に 6 本の SS(スペシャルステージ)、合計距離 29.13km を設定。SS は舗装区間を含む陸別サーキットの「RIKUBETSU LONG (4.64km)」と、かつて「RALLY HOKKAIDO」でも使われた林道の一部となる「KITA TOMAMU LONG (5.07km)」を、それぞれ 3 回ずつ走行する。

XC-2 クラスで、この最終戦を待つことなくシリーズ 5 連覇を決めているのが、前戦から新型のトヨタ・ハイラックスを投入した CUSCO Racing の番場彬選手。今回はコ・ドライバーに竹下紀子選手を起用、初めてペアを組むかたちとなったが経験豊富な竹下選手ということで不安要素は皆無であった。

そんな番場選手組に対して、競技がはじまると速さを見せたのがチームメイトで“兄貴分”とも言える柳澤宏至選手と加勢直毅選手のペア。6 月の第 3 戦・秋田から三菱・トライトンで参戦を始めた二人だが、オープニングの SS1「KITA TOMAMU LONG 1」で地区戦勢の 4 輪駆動ターボ勢に割ってはいいる総合 7 番手タイムをマーク、さらに続く SS2「RIKUBETSU LONG 1」、リピーとなる「KITA TOMAMU LONG 2」と 3 連続ステージベストでセクション 1 を完全制覇した。

前半を終えて XCR 勢のトップは柳澤選手組、総合でも 9 番手のシングルポジションにつけた。これを追うのは番場選手組、その差は 14.5 となっている。番場選手組は前半セクションでの遅れを取り戻すべくサービスでアジャスト、背景には新型車ならではの難しさもあるが、番場選手もドライビングで対応しつつ後半での巻き返しに向かう。

お昼前には気温が 20℃を超え、この日の最高気温は 22.6℃にまで上昇した陸別町。夜明け前には 4.5℃まで冷え込んでいるので北海道は確実に秋の香りが色濃くなってきているが、気温の上昇と比例するように戦いもヒートアップしていく。

セクション 2 の幕開けとなる「RIKUBETSU LONG 2」、ここで番場選手組が待望の本大会初ステージベストをマークして、柳澤選手組との差を 3.2 秒詰める。対する柳澤選手組は逃げきり体制に入り、SS5「KITA TOMAMU LONG 3」で番場選手組を 3.9 秒引き離す本大会 4 回目のステージベストを刻み、これで 3 回走行した「KITA TOMAMU LONG」を完全制覇。

13.9 秒へと拡大したマージンを背景に、最終ステージは番場選手組にベストを譲るも柳澤選手組が第 4 戦以来となる今季 2 勝目をマーク。番場選手組が準優勝でこれに続き、2026 年の XCR スプリントカップを締めくくる最終戦は XC-2 クラスで YOKOHAMA/GEOLANDAR 勢のワン・ツー・フィニッシュで幕を閉じた。

また、2026 年シーズンは XC-2 クラスのドライバー部門で番場彬選手が 5 連覇を達成したほか、全 5 クラス中 4 つのクラスでドライバーおよびコ・ドライバー各部門のシリーズチャンピオンを YOKOHAMA/GEOLANDAR 勢が獲得した。

■XC-2 クラス 優勝 | 柳澤宏至 選手 (CUSCO YH ジオランダー トライトン)

ステージは路面が荒れていなくてスムーズでしたが、自分としては RALLY HOKKAIDO で走った経験もありますし、得意なタイプの道でした。特に「KITA TOMAMU LING」はスタートから徐々に下っていくようなハイスピードコースということもあって、一度スピードが乗ってしまえばストップ・アンド・ゴーが無いのでタイムを伸ばせられるというイメージですね。

最後はマージンを持っていたので、最終ステージはそんなに無理せずしっかりフィニッシュまで運ぶことに専念しました。第 3 戦から XCR スプリントカップに参戦を始めましたが、最初はペースを掴みきれなくて戸惑った部分もありました。乗用車ベースのラリーマシンと SUV では挙動や特性も異なりますが、攻めなければタイムが出なくて、攻めすぎるとリスクなのは同じです。ただ、その“さじ加減”が違いますから、どこにポイントがあるのかを掴めたのは自分にとっての収穫でした。

■XC-2 クラス 準優勝 (2026 年シリーズチャンピオン) | 番場 彬 選手 (CUSCO YH ジオランダー ハイラックス)

前戦から新型のハイラックスにスイッチしましたが、デビューウインを出来た前戦でも感じたボディ剛性の高さなど進化した部分を活かせる場面が今回もありました。ただ一方ではラリーという競技を戦うマシンとしては開発過程なので、自分のドライビングでカバーする必要があるのも事実です。そういった背景から午前のセクションではベストタイムに少し足りませんでしたが、午後には 2 回のベストを刻んで速さを実証できたと思います。

シリーズチャンピオンは前戦で決めていましたが、新型ハイラックスのポテンシャルを引き出すためにもマイルージを稼ぐことが最終戦の大きなテーマでした。一年を戦い終えて、有り難いことに今年もチャンピオンを獲ることができて、来シーズンは参戦台数が増えるという話も聞こえてくるので、いまから楽しみです。

■2026年 XCRスプリントカップシリーズチャンピオン

クラス	ドライバー部門	コ・ドライバー部門	車両	タイヤ
XC-1	惣田政樹	猿川仁	ジオランダー・プラV・SF・デリカD5	GEOLANDAR X-AT GEOLANDAR A/T4
XC-2	番場彬	Kittisak Klinchan	CUSCO YH ジョランダー ハイラックス	
XC-2S	浅井明幸	古川和樹	三菱 YH アウトランダーPHEV YH 三菱エクリプスクロス PHEV	
XC-3S	大塚祐樹	HANA	トゥーザコアメーブル ジョランダー ライズ	

